０８／０７／２７　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：ユダヤ人の過ち３
聖書箇所：ローマ人への手紙　２章２５節－３章８節

どうぞローマ人への手紙２章をお開きください。
救いはイエスを信じる信仰によるのであると、そのことを教え続けているパウロ。この救いに関して、大きな過ちを犯していたユダヤ人を彼は責め、彼らを真理へと導こうとするわけです。これまで私たちが見て来たように、パウロはユダヤ人たちの過ちというものを明らかにして、彼らがそこから離れ、そして、主の前に正しく歩むようにと教え導こうとして来ました。私たちはもうすでにその過ちの一つ、律法に関する過ちを２：１７から見て来ました。彼らは律法を神からいただいたということに安心し、そこに救いの根拠を置いていました。このように特別に扱われているのだから救いに与るに違いないと。パウロはそれが間違いであること、誤りであることを明らかにしました。
今日、私たちが続けて見たいのは２５節のところから「割礼」に関することです。

☆ユダヤ人たちの過ち
２．割礼に関する過ち
割礼を受けてさえいれば救われると信じていたユダヤ人たち、パウロはここでもまた彼らのその誤りを明らかにするのです。
１）割礼とは
割礼とはそもそも何なのか、簡単に言えば、男性の生殖器の包皮を取り除く手術です。実は、この割礼という行為はイスラエルだけが行なっていた行為ではなく、近隣の民族も同じように行なっていたと言われています。しかし、次第に時間の経過とともにその習慣は薄れていったとある書物には記されています。
a. 神との契約のしるし
しかし、この割礼はイスラエルにとっては特別なものでした。これは主なる神がアブラハムと結ばれた契約です。神の民に属する契約のしるしでした。創世記１７章には神がアブラハムと結ばれた契約が記されていますが、その中にこの割礼のことが記されています。９－１１節**「ついで、神はアブラハムに仰せられた。「あなたは、あなたの後のあなたの子孫とともに、代々にわたり、わたしの契約を守らなければならない。:10 次のことが、わたしとあなたがたと、またあなたの後のあなたの子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。あなたがたの中のすべての男子は割礼を受けなさい。:11 あなたがたは、あなたがたの包皮の肉を切り捨てなさい。それが、わたしとあなたがたの間の契約のしるしである。」**。ですから、神がこのように命じたことですから、民はこの命令を遵守することが必要だったのです。ヨシュアはそのことを実践しました。モーセがイスラエルの民をエジプトから連れ上って約束の地に向かって来ました。ご存じのように、連れ上られた人々はヨシュアとカレブを除いてだれ一人いませんでした。約束の地に入ることはできなかったのです。４０年の間に彼らはその地で死に絶えて新しい世代が起こって来ました。そして、その新しい世代、実は、彼らはまだ割礼を受けていなかったので、ギルガルというところで、ヨシュアが割礼を施しています。ヨシュア記５：２－９のところに出てくる話です。**「そのとき、主はヨシュアに仰せられた。「火打石の小刀を作り、もう一度イスラエル人に割礼をせよ。」:3 そこで、ヨシュアは自分で火打石の小刀を作り、ギブアテ・ハアラロテで、イスラエル人に割礼を施した。:4 ヨシュアがすべての民に割礼を施した理由はこうである。エジプトから出て来た者のうち、男子、すなわち戦士たちはすべて、エジプトを出て後、途中、荒野で死んだ。:5 その出て来た民は、すべて割礼を受けていたが、エジプトを出て後、途中、荒野で生まれた民は、だれも割礼を受けていなかったからである。:6 イスラエル人は、四十年間、荒野を旅していて、エジプトから出て来た民、すなわち戦士たちは、ことごとく死に絶えてしまったからである。彼らは主の御声に聞き従わなかったので、主が私たちに与えると彼らの先祖たちに誓われた地、乳と蜜の流れる地を、主は彼らには見せないと誓われたのであった。:7 主は彼らに代わって、その息子たちを起こされた。ヨシュアは、彼らが無割礼の者で、途中で割礼を受けていなかったので、彼らに割礼を施した。:8 民のすべてが割礼を完了したとき、彼らは傷が直るまで、宿営の自分たちのところにとどまった。:9 すると、主はヨシュアに仰せられた。「きょう、わたしはエジプトのそしりを、あなたがたから取り除いた。」それで、その所の名は、ギルガルと呼ばれた。今日もそうである。」**
b. 神の命令を守る大切さを教えるもの
また、モーセはいのちの危険を経験することがありました。主が彼のいのちを取ろうとしたことがあったのです。なぜ、そのようなことを主がなさったのかというと、モーセは主なる神の命令に従って、自分の息子に割礼を施すことをしなかったのです。これは出エジプト記４章に出て来る話です。その時

に、彼の妻のチッポラが息子の包皮を取って、それをモーセの両足につけて、そして、神はその怒りを鎮められ、彼が生き長らえたという記事が４：２４から記されています。神はモーセと妻であるチッポラに何を教えようとされたのでしょう？それは神の命令に従うことの大切さです。主が命じたことを守り行ないなさいということ、それを教えるのです。神の命令に対して私たちは、どの時代の者であろうと大切なことは、その神の命令を真摯に受け止めて、それを真剣に誠実に守り行なって行くことです。このことはどの時代になっても変わっていません。神はそのことを常に望んでおられるのです。

確かに、そのような手術であり、そのように神が命じたことです。でも、この割礼はあくまでもあることを表わす象徴です。今から説明して行きますが、ここにユダヤ人たちの誤りがあったのです。

**２）象徴としての割礼が意味すること**

**ａ．人間の罪深さを示すもの**

この行為によって人間は自分には罪の赦しが必要である、自分はきよめられなければならないということをそれぞれに思い起こさせたのです。そして、からだの一部を除くことによって、自らはきよめられることが必要なのだということを指し示すものでした。

**ｂ．この神の命令に従うことによって神の命じることに従うことを覚える**

彼らはこの命令だけに従えばいいのではなく、先ほども話したように、神のすべての命令に従い続けて行くという責任があることを自覚させられたのです。それも後で私たちはみことばを見て行きます。ユダヤ人にとって、この割礼を施すというのは非常に大切なことでした。というのは、神の約束を思い起こさせるものだったからです。なぜなら、今見たように、アブラハムにその命令が与えられました。彼らは割礼を施す度にその命令を覚えるのです。神との契約を思い出すのです。神の祝福を思い出すのです。

**ｃ．主によってなされた内側の変化のしるし**

神に従うことを決心した者がその証として割礼を受けるのです。ですから、言い方を変えると、この割礼は主なる神への従順の証だったのです。なぜ、そのように言い切れるのか、ローマ人への手紙４章にアブラハムの話が出て来ます。今私たちが見て来たように、創世記１７章ではアブラハムに対してこの命令が与えられています。その割礼に関して、パウロがこのような説明を加えています。４：１０をごらんください。**「どのようにして、その信仰が義とみなされたのでしょうか。割礼を受けてからでしょうか。まだ割礼を受けていないときにでしょうか。割礼を受けてからではなく、割礼を受けていないときにです。」**とあります。つまり、アブラハムは割礼を受けて義とされたのではないのです。アブラハムが割礼を受けて救われたのではないのです。割礼を受ける前に救われていた、義とされたというのです。１１節に**「彼は、割礼を受けていないとき信仰によって義と認められたことの証印として、割礼というしるしを受けたのです。」**とあります。ですから、割礼という儀式を行なったのは、すでに内側がきよめられたことの証なのです。**「それは、彼が、割礼を受けないままで信じて義と認められるすべての人の父となり、」**と続いて記されています。ですから、割礼は確かに一つの外科的手術ですが、そこにはそのような意味があったのです。その行為を見る度に、人は自分の罪がきよめられること、同時に、律法のすべてに従う必要があること、そして、ユダヤ人にとっては、特に神を愛する敬虔な者たちにとっては、これは私たちに与えられたすばらしい約束であるということを思い出す機会になったのです。そして同時に、これは内側に為された神のみわざの証でもあったのです。

ところが、この割礼は次第に儀式となり習慣となって行くのです。ある歴史の本を見ると、アッシリアとバビロンでは割礼は行なわれていなかったとあります。捕囚の間はイスラエルの人々は割礼を行なっていなかったのです。捕囚後のイスラエルで、この行為は特別に選民のしるしとなり儀式となったと記されています。捕囚から解放された彼らが、これは私たち特別な選民のしるしなのだと言って、この行為を儀式にして行くのです。そして、何が起こったかというと、ユダヤ人たちは割礼の本来の目的を忘れて、割礼を受けることが救いを得る道であると信じ、その行為だけを重視し始めて行くのです。そこに問題があったのです。ラビの文献のミドラシュコレクションの中で創世記のラッパ４８章８節にこのような記事があります。「ゲヘナから逃れるために、またゲヘナの厳しさを和らげる手段として、割礼が効力を発揮したのです。」と、彼らはこのように言います。「アブラハムがゲヘナの入り口、この地獄の入り口に座り、割礼を受けたイスラエル人がその中に下りることを許さないだろう。」と、このような教えが広まり始めたのです。このようなことをユダヤ教の教師たちが教え始めたのです。割礼を受けていたら、その人々はゲヘナ、地獄へと行かない、そこにアブラハムがいて止めてくれると。どこからそのような教えを引き出して来たのでしょう？聖書のどこにそのような教えが記されているのでしょう？でも、そのように彼らはこの割礼という行為だけが一人歩きすることを許してしまったのです。そのようにして彼らはこの行為を重視し始めたのです。

そこで、ローマ３章に戻って、そのような中にあってパウロは、ユダヤ人たちを正しく導こうとする

のです。彼らの過ちを明らかにして、彼らを正しく導いて行こうとするのです。この２５－２７節を見ると、三つのパウロの矯正、パウロが彼らの間違いを示して正しく導いて行こうとするその様子をうかがい知ることができます。

３）割礼に関するパウロの矯正

a. ユダヤ人への有罪宣言

まず、２５節のみことば**「もし律法を守るなら、割礼には価値があります。しかし、もしあなたが律法にそむいているなら、あなたの割礼は、無割礼になったのです。」**とあります。ユダヤ人への有罪宣告とも取れるようなことが記されています。２５節のこのみことばでは、もし、律法によって救いを得ようとするなら、そこには完璧な従順が必要だと言っているのです。すべての点で律法にそむくことなく、すべての点で律法に従順でなければ救いを得ることはない、それがパウロがここで言わんとしたことです。**「律法を守るなら」**、律法を履行するなら、律法を実行するならと、しかも現在形ですから継続してそのようにするなら**「割礼には価値があります」**と言います。「価値がある」というのは「得る、手に入れる」ということです。律法を完璧に履行すれば、いったい何を得ることができるのでしょう？救いです。完璧に律法を守り行なうことができるなら、あなたは救いを得ることができると言っているのです。しかし、もしあなたが律法にそむいているなら、**「あなたの割礼は、無割礼になった」**、**「そむいている」**というのは「埒を超える」ということです。違反者だということです。もしあなたが違反しているのであれば、あなたは無割礼、つまり異邦人だというのです。ユダヤ人たちはユダヤ人以外の無割礼な人々を異邦人と呼んだのです。また同時に、救われていない人々をそのように呼んだわけで、もし、この律法に違反しているのであれば、あなたは異邦人、救われていない人々と同じであるというのです。正確に言うと、パウロはこの２５節でこのように言いたかったのです。もし、律法を守り続けるなら救いを手に入れることになる、もし、あなたが律法の教えに不従順な人として歩み続けて行くなら、あなたの割礼はすでに無割礼になっていると、完了形を使っています。もうすでにそうなっていると言います。そのようになっているから、あなたは守り行なうことができない、つまり、守り行なえないことは救われていない証拠だというのです。

ガラテヤ人への手紙に今私たちが見ていることをパウロは次のように教えています。ガラテヤ５：３に**「割礼を受けるすべての人に、私は再びあかします。その人は律法の全体を行なう義務があります。」**と記されています。律法によって救われるという人々に対してパウロが言うのです。もし、あなたがそのように信じているのなら、あなたが覚えなければいけないことは、あなたは割礼を行なうだけではなく、神の律法すべてに完璧に従わなければ救いを得ることはない、それが必要だと。それを聞いている人々の反応というのは、当然、完璧に、すべての点でというのは無理だと言います。だから、気づくはず、気づくべきなのです。すなわち、律法によって救いを得ることはあり得ない、神の教えを１００％守ることによって救いを得ることのできる人など存在していないと。それに気づいた人は神に助けを求めるのです。ですから、パウロはまずこの２５節で、あなたたちは割礼を受けた、だから、救われていると言っているけれども、あなたたちはこのことを見落としている、律法によって救いを得ようとするのなら、割礼を行なう以外に、すべての点で教えに従わなければいけない、あなたたちはそれを守ってない、だから、あなたたちは割礼を受けたら救われると言っているけれども、そこには救いはない、あなたたちは救いをいただいているのではなくて、あなたたちにはさばきが迫っていると言っているのです。

ｂ．救いは民族とは無関係

２６節を見ていただきますと、ここにはパウロが今度は救いというものは民族とは無関係なのだ、彼らが主張していたことに対して、それは間違っているということをここでも繰り返しています。２６節**「もし割礼を受けていない人が律法の規定を守るなら、割礼を受けていなくても、割礼を受けている者とみなされないでしょうか。」**、**「割礼を受けていない人」**、つまり、異邦人のことです。ユダヤ人によれば救われていない者たちのことです。すなわち、律法の教えを彼らが守るなら、割礼を受けていなくても受けている者とみなされないか、肉体の割礼を受けていなくても、割礼を受けた者、神の契約の中に招き入れられた者、神の祝福をいただく者、救われた者と言えないかというのです。ユダヤ人たちは言いました。自分たちは異邦人のようではない、ユダヤ人だから救われているのだと。パウロが言うことは、救いは民族とは関係ない、ユダヤ人でなくても、神の教えに従う人々は救いに与るのだということです。パウロが強調していることは、繰り返していますが、どの民族に属するかではなくて、律法の教えを守っているのかどうか、そこに彼らの目を向けさせようとするのです。

ｃ．救いは律法や割礼とは無関係

２７節でも、パウロは彼らの過ちを指摘するのですが、三つ目は、その救いは律法や割礼とは無関係だということです。まず最初に、彼らの有罪を宣告したパウロは、救いというのは民族とは無関係だ、そして同時に、救いは律法や割礼とは無関係なのだと２７節で言うのです。２７節には**「また、からだに**

**割礼を受けていないで律法を守る者が、律法の文字と割礼がありながら律法にそむいているあなたを、さばくことにならないでしょうか。」**とあります。からだに割礼を受けていないで律法を守る者、今見て来たように救われていないとユダヤ人が見下している異邦人たちが律法を守るなら、**「律法の文字と割礼がありながら律法にそむいているあなたを、」**、実際に書かれた律法が与えられて律法を守っていると言うけれど、実は、それ以外の律法に逆らっているあなたたちをさばくことにならないかというのです。この**「さばくことになる」**というのは、異邦人がユダヤ人をさばくということではなく、彼らがさばかれる時に、この異邦人たちが正しかったということが明らかになるということです。なぜなら、ユダヤ人たちは律法が与えられているから自分たちは救われている、割礼を受けているから救われていると信じていたからです。でも、従順に主に従って救われた人々が、私たちが正しくてユダヤ人が間違っていたことを明らかにする、そのことをパウロはここで言うのです。

もう一度ガラテヤ人への手紙５章を見てください。５：２に**「よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。」**、このガラテヤのユダヤ人たちは、割礼を受けることによって救いを得ると教えていたのです。だから、パウロは言ったのです。もし、そのようにあなたたちが信じ、そして、あなたたちが周りの人々にそのことを教えるのなら、キリストは何の益もないと。なぜなら、彼らはキリストによる救いを無視して、割礼による、律法による救いを求めようとしているからです。４節**「律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。」**と、神が備えてくださったキリスト・イエスによる救いを無視して、自分で救いを得ようとするなら、悲しいことに、あなたは**「恵みから落ちてしまった」**、その恵みをいただくことはないというのです。

ですから、ローマ２：２７に戻って、パウロはこういう行為を行なっているから、こういうものを神からいただいているから救われているのだという人々に対して、救いはどこから来るのか、それはそういうことを守り行なうことによって与えられることはないと教えています。なぜなら、正直にすべての律法を守り行なうことができるかというと、だれ一人としてそんな人はいないからです。彼らもそのことに気づくはずなのです。そのことにパウロはあえて気づかせて、そして、救いはキリストだけだということに目を向けさせようとするのです。そこで彼がしたことは、行為ばかりを見ている人々に対して、神の関心はあなたの行為ではなくて、あなたの心なのだということを言うのです。心が問題だと言うのです。どのような心なのかということを教えようとするのです。この２８－２９節を見ると、神の関心は心だということをパウロは繰り返すのです。２８－２９節**「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。:29 かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。」**、ここではまた民族に関して話をしています。**「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではない」**、**「人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人なのだ」**と言います。覚えておられますか？この「ユダヤ人」というのは「称賛」という意味があると私たちは最初に学びました。ですから、外見だけのユダヤ人、何をしたか、どんなことをしているかとそのような外見ばかりにこだわっている人たちは神からの称賛はないと言うのです。では、神から称賛される人、神からほめられる人はどのような人でしょう？内側が神の前に正しい人々、つまり、**「人目に隠れたユダヤ人」**です。心は見ることができません。でも、神はそこをごらんになって、そこに関心を払っておられるというのです。

また、２８節の後半と２９節の後半を見ると、今度は割礼に関しても言います。**「外見上のからだの割礼が割礼ではない」**、**「文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼」**なのだと。パウロはここで**「文字ではなく」**、つまり、律法ではなく**「御霊による、心の割礼こそ」**神の前に価値あるものだと言うのです。ユダヤ人たちは、その書かれた文字を見て、その律法を見て、実は従っていないのに、その律法に従う、従っていると言ったのです。パウロが教えることは、文字による割礼ではなくて、律法が記している割礼ではなくて、もっと大切な割礼がある、もっと神が喜ばれる割礼がある、その割礼というのは、御霊によって心が割礼を受けることだと言うのです。実は、これは新約聖書だけの教えではなくて、旧約聖書もそのことを教えているのです。申命記の中でモーセがこのようなことを教えます。申命記１０：１６に**「あなたがたは、心の包皮を切り捨てなさい。もううなじのこわい者であってはならない。」**とあります。頑なであってはならないというのです。**「心の包皮を切り捨てる」**こと、心の割礼が必要だと言うのです。同じように、申命記３０：６でもモーセは同じことを教えています。**「あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたが生きるようにされる。」**。ですから、もうすでに旧約の時代から、神の関心はそのような形だけの儀式ではなく、心だったのです。神の関心はそれらの儀式を受けたからもう大丈夫ではなくて、神を愛し神に忠実に従い続けて行くその信仰の歩みだったのです。そこに価値があると言うのです。

もう一度、ローマ書２章に戻って、２９節に**「その誉れは、人からではなく、神から来るものです。」**とあります。先ほども見たように、ユダヤ人というのは「称賛」という意味です。価値ある称賛、神からの

称賛というのは、このように心が神の前に正しい人だというのです。イエスがこの地上において働きを為しておられるとき、あの山上の説教の中でそのことを指摘されました。マタイの福音書６章で、その当時のユダヤ教の教師たちに対して非常に厳しいことを言われています。マタイ６：１－６**「:1 人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から、報いが受けられません。:2 だから、施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。:3 あなたは、施しをするとき、右の手のしていることを左の手に知られないようにしなさい。:4 あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。:5 また、祈るときには、偽善者たちのようであってはいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。:6 あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」**とあります。１節では「善行」、２－４節では「施し」のことです。５－６節では「祈り」のことです。そして、１６節には「断食」のことが記されています。**「断食するときには、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません。彼らは、断食していることが人に見えるようにと、その顔をやつすのです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。」**と。

なぜ、このようなことを言ったのでしょう？彼らが求めていたのは人から誉められることだったのです。ですから、彼らのこのような行為は見事に人からの称賛を得ているかもしれないけれど、それはむなしいと言うのです。なぜなら、神はその心を見ておられるからです。私たちクリスチャンが求めなければいけないのは人からの称賛ではなく、神の前に立ったときに神が誉めてくださる、その称賛なのです。人からどれ程誉められても神がだめと言われるなら、こんな悲しいことはありません。人をだますことはできても神をだますことはできません。そして、私たちが分かっていることは、その神の前に立ち、一人ひとりさばかれることです。そのときに、私たちの働きの真価が明らかにされるわけです。救われた私たちクリスチャンの人生が神の前に価値があったのかどうかが明らかにされるのです。そのときに神からの称賛がなければ、神が誉めてくださらなければ、どれ程人生を無駄にして来たか、そのことが明らかになるのです。イエスはこのように、人前で善行をして、人前で一生懸命「自分は立派だ、自分は霊的だ、自分は信仰心が篤くて」というように大風呂敷を広げているような連中に対して、気をつけなければいけない、最終的にあなたの信仰の歩みに評価を下すのはあなたの心を見ている神だ、その神の前に正しくあれと言われるのです。

最後にもう一箇所、ヤコブが私たちに教えてくれることを見てください。ヤコブ１：２６－２７**「自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです。:27 父なる神の御前できよく汚れのない宗教は、孤児や、やもめたちが困っているときに世話をし、この世から自分をきよく守ることです。」**と。神の前に価値ある信仰、宗教というものについてヤコブはこのように教えたのです。結論を言えば、ヤコブが言っている一番大切なことは「あなたの心だ」ということです。２６節にある**「宗教」**というのは、礼拝などでなされる儀式であったり、祭りであったり、礼典であったり、そのような外面的な行為、人に見える行為です。そういうことにどれ程熱心であっても、それを神が喜んでおられない可能性があることをヤコブはここで告げるのです。神の前に価値のある信仰とは何でしょう？それはここに記されているように四つのことがあります。

◎神の前に価値ある信仰とは？

１）<u>正しいことば</u>：一人ひとりが「正しいことばを出す」ということです。救われている者にふさわしいことばを話しなさい、自分の思うことを話したり、自分の口から悪口が出たり、批判が出たり、怒りが出たりしてはならないと言うのです。**「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」**とエペソ４：２９で言われている通りです。どんなに人の前で立派なことをしていても、あなたがそのことばにおいて罪を犯したら神は喜ばれないと言うのです。

２）<u>正しい心</u>：二つ目にヤコブが言うことは「正しい心」です。見せかけの信仰は人をだませても神をだますことはできません。自分の心を欺いていると言います。自分の心でないものを見せようとしているのです。そのような人がどんなに熱心に奉仕をしても、神はお喜びにならないと言っているのです。神の関心は何をするかよりも、どのような信仰者としてあなたが生きているかです。どのような信仰者として神を愛し神を畏れているかです。

３）<u>正しい配慮</u>：三つ目は「正しい配慮」です。２７節にあるように**「孤児や、やもめたちが困っているときに世話を」**するのです。必要な人々に対して手を差し伸べて行くのです。

４）<u>正しい歩み</u>：神の前に価値ある信仰というのは、正しいことばであり、正しい心であり、正しい配慮であり、四つ目に彼が言うことは「正しい歩み」です。**「この世から自分をきよく守ること」**、罪から離

れてきよくあることです。
　ヤコブが教えているように、パウロも実はこのようなことを言っているのです。ヤコブが私たちに教えてくれたことは、神のあなたに対する関心は、あなたがどのような信仰者として生きて行くかということです。クリスチャンである皆さん、私たちは様々なことを行ないます。例えば、教会の中では聖餐式もありバプテスマ式もあり、いろいろな奉仕があります。私たちが考えなければいけないのは、何のために例えば聖餐式をするかということです。聖餐式はそれによって私たちが祝福を受けるためではありません。それは私たちが自らの信仰を吟味するためです。どのようなことを吟味するのでしょう？私の信仰は神の前に正しいかどうかです。私は神の前に正しく歩み、神を正しく崇め、神に従い続けているかどうか、そのことを吟味するためです。何か特別なものをもらうのではありません。私たちはもう神からもらい過ぎています。その神から祝福をいただいている私たちが、神の前に正しく生きているかどうかを吟味する機会なのです。そのことを忘れて、聖餐式を行なったということに満足を求めているのなら、私たちはもしかすると神に喜ばれていない可能性があるのです。こうして礼拝に集ってきます。礼拝に集うことが目的であるなら、あなたは自分の心に対して関心を持っていないでしょう。礼拝に来たことに満足しているかもしれません。今週もこうして来ることができた、これで神もお喜びになっているだろうと。そのようにあなたが思ったとしても、神はそのようには言われていません。神の関心は、どんな思いを持ってここに来ているかです。あなたの心が神を礼拝するにふさわしい心かどうかです。あなたの心の中に、神の前に礼拝を捧げるにふさわしくないもの、礼拝者としてふさわしくないものがあるかないかです。皆さん、神をだますこと、欺くことはできないのです。必要なことは、私たちの心が神の前に正しくあるかどうかです。神の関心はそこです。
　ユダヤ人たちは、そこに目を向けていなかったのです。彼らは自分たちが神の前に喜ばれている存在だと自負していました。なぜなら、我々は特別だ、我々を見てごらん、こうして割礼を受けて守っている、これ以上何を神が望まれるかと…。神が望まれたのは一人ひとりの心だったのです。どのような思いを持って歩んでいるのかです。クリスチャンである皆さん、どんな思いを持って信仰生活を歩んでいますか？人に見られる働きをして、人から誉められることを目的にしているのなら、それはむなしいです。でも、隠れたところで見ておられる神のために喜んでしているのなら、どんな働きであっても神は喜んでくださるのです。神が称賛をお与えになる信仰者、それはこのように心が神の前に正しい人です。ヤコブが教えたように、私たちのことばも私たちの歩みも、私たちの人々に対する配慮も、私たちの心が神の前に正しいかどうか、その方が大切なのです。もし、それを無視して、私たちが外側だけを重視するなら、必ず信仰者は疲れます。なぜなら、自分の心と行ないとが違ったら、そこに段々矛盾が生じ、私たちはしんどくなるからです。自分が偽善者だということが分かっているからです。人々の前でどんなに霊的だと見せても、心が神の前に逆らっているなら、それは自らを苦しめて行きます。しかも、悲しいことに、神の栄光は現わされて行きません。
　私たちにとって必要なことは、今こうして神が私たちに教えてくれたように、私たちの心を吟味することです。私はどのような思いを持って今日を生きているのか、どのような思いを持って今日を生きて行きたいのか、私の願いとしていることは、人に自分を誇ることなのか、それとも神の栄光が現わされることなのか…。もしそうなら、心をきよめて、そして、私たちのすべてを神に捧げて神の栄光のためだけに生きることです。この方からの称賛こそ価値のあるものだ、私たちはそのことを覚えて生きることが必要です。どうぞ信仰者の皆さん、信仰を吟味して、そして、私はどのような思いを持ってこの働きをしているのか、どのような思いを持って今日を生きているのか、そのことを考えながら一日一日を歩んでください。主の栄光が現わされること、主が喜んでくださること、そのことを望みながら歩むなら、神から称賛が来ると、そのようにパウロが約束してくれました。それこそ私たちの望みです。それこそ私たちの求めているものです。